日本基督教団
柿ノ木坂教会

牧　　師　渡邊　義彦
協力牧師　松下　恭規

教 会 報

183 号 2017 年 10 月 1 日

〒152-0022
東京都目黒区柿の木坂
1-31-19
電話：03-3717-3870
Fax：03-3717-3916

巻頭言

「共に戦う者たちへの感謝」

――フィリピの信徒への手紙第２章２７節――

牧師　渡邊　義彦

神は彼を憐れんでくださいました。彼だけでなく、わたしをも憐れんで、悲しみを重ねずに済むようにしてくださいました。

（新共同訳聖書）

使徒パウロは、悲しみに悲しみを重ねずに済んだ、と申します。この言葉の背後に伝道者が福音伝道の中でどれほどの悲しみを経験してきたかが語られていると思います。使徒パウロは、今、牢獄に囚われています。判決が下り刑によって地上の働きを終えるのか、なお生きて福音伝道のために力を尽くすことができるのか、という厳しい状況にあります。それに加え、監禁されている牢獄の劣悪な環境や日々の生活の困窮があります。牢獄に囚われ自由も奪われてしまっていることが、使徒の悲しみに含まれていることでしょう。そして、使徒が悲しんできたのは、自分に直接及び、また及ぼうとしている苦しみだけでなく、兄弟姉妹、同労者、戦友たちが被った苦しみによることです。

一緒に祈っていたあの兄弟が帰ってこない。今朝、おはようと挨拶を交わし勤め先に別れて行ったあの姉妹が夕べには帰ってこなかった。あの兄弟が、あの姉妹が牢に引かれて行ったと聞いた。あの兄弟が貧しさの中、病気で亡くなったと伝え聞いた。あの姉妹が家族に看取られ息を引き取ったという。

福音を述べ伝える自由などほとんど認められていない社会で、福音を宣べ伝えることでかえって社会から排除され、生活は困窮し、一切、福音を宣べ伝えることはまかりならないと捕えられ、引かれ行き厳しい拷問を受け、口止めを固く拒むならば直ちに命を絶たれてしまう。このようにして、使徒は、幾多の兄弟姉妹たちを天に送ってきました。あの兄弟、あの姉妹の魂が天に移されることは幸いであるし、今よりまったく安全なところに受け入れていただくのだから喜ぶべきことです。けれども、その兄弟姉妹たちが身に負った糾弾、迫害、苦しみを思うと悲しくてたまらず腸も千切れんばかりになるのです。

一緒に福音を伝道してきた同労者たちを失い、世界に福音を伝える働き手を一人失うことは大きな痛手です。福音を宣べ伝えることを拒む力、救いを受け入れることを拒否し退ける勢力に対して、祈りと力を合わせ一緒に戦線を組み戦ってきた戦友を一人失うことは大きな欠けと破れです。使徒の悲しみは、戦列を離れざるを得なかった戦友のこと、福音を伝える労苦を共にしてきた同労者たちともう一緒に働くことができなくなってしまったこと、兄弟姉妹たちが福音ゆえに身に負った苦しみ、それが使徒を悲しませてきたのですし、これからも彼は悲しまねばならないことを覚悟しています。

しかし、今、側にいてくれるエパフロディト

については、使徒は、悲しみに悲しみを重ねずに済んだ、と言います。エパフロディトはフィリピ教会員でした。監獄での厳しい生活を使徒と一緒に祈り支えるために、日々食べるにも事欠くような監禁生活で、体においても、霊においても、使徒を支えるためフィリピ教会が全権を委ねて派遣した使者でした。このエパフロディトを任務の半ばで、パウロの身に起るであろうことの見通しがまだはっきりとしないままに、彼をフィリピ教会に再び送り返すことをパウロは手紙に記します。パウロは、おそらくエパフロディトを教会に帰らせることを記した手紙を、彼自身の手に託して持ち帰らせたのでしょう。使徒は、エパフロディトの働き、彼をいかに信頼し、愛しているかを心を込めて記しました。

エパフロディトは、わたしの兄弟、わたしの同労者、わたしの戦友だ。あなたがたのところから尊い贈りものを携えて海を渡ってきてくれた使者だ。エパフロディトが来てくれたおかげでどれほど励まされたことか。あなたがたが祈ってくれていることを、どれほど身近に覚えることができたことか。エパフロディトは、ここでも、キリストのために、キリストの御名とキリストが果たしてくださった救いを宣べ伝えるため、福音伝道のため命を献げ仕えた。福音のために献身したこのような人々のことを覚えるように。伝道のためエパフロディトは、まさに命を奪われんまで働いた。そして、今また病気のため苦しんでいる。彼を主の名によって受け入れてほしい。彼の命が奪われることを神御自身が欲されず、なお彼に生きることを許してくださり、そのようにして悲しみに悲しみを重ねることのないように、主は、あなたがたをも、わたしをも憐れんでくださったのだから。この手紙を携え行くエパフロディトを、主において、喜び受け入れてもらいたい。

使徒は、戦友を失い、同労者を送り、兄弟姉妹との交わりを絶たれてきました。それは言い表すことのできないほどの悲しみでした。しかし、パウロは、これらの悲しみと同時に、深いところから湧き上がり、そして天高くから降り注がれる喜びを知っていました。キリストによる救いです。キリストを信ずる信仰です。この救いは、この信仰は、どのような時代であっても、わたしたちの身の回りがどのように変転して身にどのようなことが及ぼうとも、どんな力によっても、どんな勢力、権力によっても奪うことのできない喜びの源です。

パウロも、テモテも、そしてエパフロディトも、フィリピ教会員たちも、キリストを信ずる信仰に生き、救われ、キリストゆえの喜びに生きていました。福音伝道の戦いは、神の兄弟姉妹たち、神の同労者たち、神の戦友たちによって戦われてきました。そして、この戦いは、まず何よりも、神が戦ってくださる戦いです。福音伝道のための戦列、前線は、時代の、世界の、至るところに張り巡らされていて、神が戦ってくださいます。主の戦いに参戦するわたしたちは、敗れることもあるでしょう。失策によって手痛い敗退を喫することもあるでしょう。戦列から退かねばならないようなこともあるでしょう。しかし、神が、主イエス・キリストにおいて果たしてくださった救いは、全歴史を、全世界を覆って余りあります。キリストの救いにわたしたちも与って、福音伝道のため共に戦わせていただきます。この戦いには、キリストがすでに勝利を収めくださったのです。勝利の確定が約束されています。この戦いに共に戦っている兄弟姉妹たち、同労者たち、戦友たちがいます。共に働く人たちがこれからも起こされることが約束されています。

集会出席統計（月平均人数）

	2017年	
	7月	8月
主日礼拝	87.6	76.8
聖書と祈り会	13.5	−休会−
教会学校＊	109.2	78.3

＊保護者、教師を含む

（第1主日開催）	7月2日	8月6日
聖餐夕礼拝	16	5

受洗された方のご紹介

「導かれて」

長峯（ながみね）　幸来（さら）

「18 歳になったら決める。」これは私の目標であり、言い訳でもあったのだと思います。

しかし、クリスチャンになることを先延ばしにしてしまう私にとってこのリミットは必要なものでした。このような私に神様はたくさんのきっかけとお導きを与えてくださいました。

私は小学五年生の時、温かい校風に惹かれ「ここ以外考えられない！」と思い、勉強に励み、無事玉川聖学院に入学しました。初めての終礼の際、自分がまるで導かれたような気がする、と書いた終礼のためのメモ書きは、6 年経った今でも私の聖書に挟んでおり、その時の気持ちは今も変わらず「私は神様に玉川聖学院に導かれた」という喜びと感謝があります。

そんな私に神様はさらなるきっかけを与えてくださいました。中学三年生の頃、所属している剣道部の大会でのことでした。「勝ちたい。」という気持ちが強すぎたからか、肩に力が入り練習通りにいかず、結果は一回戦負けでした。一方で、一人しかいない同級生の子はどんどん勝ち進み優勝してしまいました。日頃からライバルとしてお互い頑張ってきた同級生との差は、私をとても落ち込ませました。そんな時、神様にお祈りしました。もう、この気持ちをなんとかしてくれるのは神様だけだ、という思いから一生懸命にお祈りしました。すると、気持ちがどんどん軽くなっていきました。これが私と神様の出会いであったのではないかと思います。

そこから少しずつ友人の証やバイブルキャンプや日々の礼拝などの様々な場面を通して、神様との繋がりがますます深められていきました。

そして、18 歳を迎える時が近づいた頃、母の悩みを聞きました。それは去年亡くなった母の祖母の話です。母は小さい頃、母の妹が入退院を繰り返していたので、よく祖母に預けられていたそうです。母の祖母はなぜか祖父に内緒で、こっそり近所の教会に母を連れていっていたそうです。幼い母は、祖母がクリスチャンなのかどうかも知りませんでしたし、そんなに深い話もしなかったそうですが、祖母が亡くなった時、普通に仏教形式でお葬式をあげたことで、母は「祖母は本当は教会で式をあげてほしかったのでは？もっとしてあげられることがあったのではないか？」ということをずっと気にしていたそうです。そんないつもと違う元気のない母を見て、私は自然と「それなら教会に行こうよ！」と誘ってみました。その頃、私は教会には毎週通っていましたが、友人に誘われた教会や近所の教会などに通い、決まった教会を持っていませんでした。母と一緒にそれらの教会にも行きましたが、しっくりこなかったようです。私自身も玉川聖学院の生活の中でやはり「18 歳でクリスチャンになる」と決意していた頃だったので、決まった教会を持たなくてはと思っていました。そして、近所で母と通いやすい柿ノ木坂教会に、私達は導かれました。私も母も温かい教会の方々に惹かれ、二人で「ここにしよう！」と決め、洗礼にいたりました。

柿ノ木坂教会での教会生活は短い中での受洗となってしまいましたが、母と通える、こんなにも温かく、素敵な神様のお恵みに溢れているこの教会に導かれ、洗礼を受けられたことをとても嬉しく思います。

私の信仰を支えてくださった玉川聖学院の先生方や友人、これまで出会ってきた教会員の方々、柿ノ木坂教会の教会員の方々、特に受洗までの道のりを共に歩んでくださった渡邊牧師といつも優しくご指導くださる教補の桝田京子先生に心から感謝申し上げます。これからの人生を神様と共に歩んでいきたいです。これからよろしくお願い致します。

わたしの聖句、わたしの讃美歌 １３

「私を変えた聖句、讃美歌」

美根　明子

１．聖句

私は思い悩む性格でしたが､『どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。』（フィリピ 4：6～7）のみ言葉に出会って、少しずつ変わっていくことが出来ました。パウロの言葉は、キリスト・イエスの「日常の生活ばかりに気を取られて思い悩んではいけない。大切なことは『まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。』(マタイ 6：25～34)」の教えからだと思います。

初めの頃「思い悩むな」とは「心配しないで私に任せてよいのだよ」との神からのやさしい言葉と思っていましたが、聖書を読んでいるうちに、これはやさしさだけではなく神のご命令だと思うようになりました。

マタイ 14：22～33 に、湖上を歩いてこられるキリスト・イエスにペトロが「私も歩かせてください」と願いでて歩かせていただきましたが、強風に怖くなり慌てたので結果溺れそうになった話があります。キリスト・イエスは『信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか』とおっしゃいました。『思い悩むな』は一切を神に任せて疑ってはいけないということだと気づきました。これは大変なこと、むずかしいことだと思いました。心配に傾いていくことの方が自然で容易な事ですから。神に全信頼を置き、疑ってはいけないことは自分を奮い立たせる相当なエネルギーを要することです。

しかしキリスト･イエスは頑張るのではなく、二つの掟『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』と『隣人を自分のように愛しなさい』を守り、「まことのぶどうの木」であるキリスト・イエスに繋がっていれば『私の名によって祈ることはなんでもかなえてあげよう』とおっしゃいました。またパウロも『いつも喜んでいなさい。感謝しなさい。そして祈りなさい』と勧めました。いつも喜んでいることも、いつも感謝することもできませんし、たった二つの掟を守ることさえもむずかしいのです。だから「祈りなさい」と。マルチン・ルターも信仰とは努力で得るのではなく神から与えられるものだといいました。信仰も恵みによるものとは思ってもいないことでした。

神から愛されることだけではなく、神を愛することも神の恵みからなのでしょうか。

「私に信仰を与えてください」と日々祈って生きていきなさいと教えていただきました。

神は、思い描く理想のものばかりを与えてくださるとは限りません。辛いことや悲惨なこともお与えになります。そのような事に襲われたらと恐れていますが､『神は真実な方です。あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道も備えていてくださいます。』(コリントⅠ10:13) どんな悲惨の中でも神は私を一人きりにはなさらず、恵みを用意しておいてくださると約束してくださいますから信じたいと思います。

2．讃美歌

昨年の主日礼拝で｢讃美歌 21-409 番すくいの道を」が賛美されたことがありました。作詞者は由木康先生、作曲者は高田三郎先生でした。お二人が作られた讃美歌を賛美しながらとても温かい幸せな気持ちになりました。

由木康先生には、直接お目にかかったことは

ありませんが、お嬢様の斎藤潤氏は婦人会連合文書委員会の前委員長でいらして「教会婦人」誌に「クリスマスのさんびか連想」と題して牧師であられたお父様のお話を書いてくださったことがありました。文学・音楽・美術に心を曳かれ、大正デモクラシーからマルクス主義、そして軍国主義という時代の中でキリスト者として葛藤を重ねられて「この人を見よ、この人こそ人となりたる生ける神なれ」1923 年作等の讃美歌を作られたとありました。他に「みどりも深きわかばの里」「血しおしたたる主のみかしら」「主よ我をばとらえたまえ」等私たちがいく度も喜びをもって賛美する美しい讃美歌もたくさん作られました。

説教を伺ったこともお目にかかったこともありませんが讃美歌を賛美する時、先生の思いが伝わってくるような気がいたします。

作曲家の高田三郎先生は懐かしい方です。

学生時代をカトリック系女子大の短期コースで過ごしましたが、そこでピアニストであられたシスターがミサ曲を賛美するコーラスグループを作られました。私もメゾソプラノで参加させていただきました。高田三郎先生はシスターの東京芸術大学の同級生で、年を経られてもお互いに尊敬し合う素晴らしいお友だちでした。ラテン語のミサ曲のほかに先生の「やまとのささげうた」（日本語のミサ曲）も歌いました。又、先生の「みずのいのち組曲」もコンクールなどで歌わせていただきました。作詞高野喜久雄、「雨・水たまり・川・海・海よ」全ての曲が神をあらわす素晴らしい合唱曲でした。

ありとある芥をすべて受け入れて新しく生れ変わらせる海。許し合う者許し合えぬ者の上にも等しく降る雨など神の広さ奥深さを感じました。夏の合宿の時、高田先生は時々様子を見にきてくださり、アドバイスをしてくださいました。高田先生の指揮、シスターの伴奏で歌えたことは今思うと身に余ることでした。

高田三郎先生はカトリックの信者、由木康先生はプロテスタントの牧師、そのお二人が作曲、作詞を担って讃美歌を作られた経過はどんなことであったのでしょう。お互いにどんなお話し合いをなされたのでしょう。

讃美歌にはエキュメニカルと書いています。救いに道を開かれたイエスが礎の教会。分かたれていてもみ言葉を述べ、パンをさく教会。世の波風はさわいでも主を待ち望む教会。

3 番まである歌詞は毎回「主の教会はただひとつ」と結ばれています。カトリックもプロテスタントも、また他の宗派もイエス・キリストを救い主と仰ぎ主の食卓でパンをさけば皆「主の教会はただひとつ」という、わくわくする宣言です。カトリックで洗礼を受け、プロテスタントの教会に通うようになった私にとって、どちらも否定されないことはうれしいことです。

☆☆☆教会の行事☆☆☆

◆いままであったこと

◇7 月 30 日（日）～8 月 1 日（火）教会学校小学科、ジュニアチャーチ、丹沢サマーキャンプ
◇8 月 27 日（日）午後 1 時～幼稚科デイキャンプ、午後 5 時～ジュニアチャーチ夕涼み会
◇9 月 24 日（日）高齢の方などに配慮した礼拝
午後 1 時 30 分～南支区教会学校合同運動会、玉川聖学院体育館

◆これからの予定

◇10 月 22 日（日）子供と共に守る礼拝（ＣＳとの合同礼拝）
◇11 月 5 日（日）聖徒の日記念礼拝

＜主の働き人・各会・各グループは今　３４＞

「教会学校 2017 年サマープログラムの報告」

教会学校校長　桝田　恒

いつも教会学校を覚えてお祈り下さり感謝申し上げます。夏の間も子どもたちと共に、主の日の礼拝を守りみ言葉の恵みに与りました。

各クラスで夏のプログラムを計画･実施することが出来、そのご報告をさせて戴きます。

１．丹沢サマーキャンプ

7 月 30 日(日)から 8 月 1 日(火)まで、例年同様丹沢ホームで。生徒 31 名、教師 8 名、計 39 名が参加しました。

今年はキリスト教界にとっては「宗教改革 500 年」の節目の年です。そこで教会学校のキャンプのテーマも

宗教改革(しゅうきょうかいかく)500 年！
―これからの 500 年を考えよう―

と決まりました。大きな、難解の主題です。教師会で渡邊牧師よりテーマの取り上げ方・ヒントなどを戴き、各クラスの教師たちどのように取り上げるか頭を悩ませました。

開会礼拝・2 回の朝の礼拝・閉会礼拝の 4 回の礼拝で渡邊先生から宗教改革、マルチン・ルターについてお話を聞き、子どもたちもじわじわと興味が湧いてきました。みなさんも子どもたちと一緒に礼拝の聖書箇所をお読みになってみて下さい。

① キャンプはじまりの礼拝
「マルティン・ルターの神の義の発見、信仰義認」(ローマの信徒への手紙第 3 章 21～31 節)

② 朝の礼拝
「聖書が大切、聖書のみ」(テモテへの手紙二第 3 章 10～17 節)

③ 朝の礼拝
キリストだけを信じる、キリストのみ」(コリントの信徒への手紙一第 1 章 18～第 2 章 5 節)

④ キャンプおしまいの礼拝
「みんながキリストの祭司として遣わされる、全信徒祭司」(マタイによる福音書第 28 章 16～20 節)

← みんなで記念写真
↓ マスつかみ

キャンプのハイライトは川あそび。水に足をひたし、慣れてくれば水の中へ。水を掛けたり泳いだりと満喫しました。即席の生け簀(浅いプール)にマスを放し、みんなでマスつかみ。

取ったマスをホームの方に焼いていただき、おにぎりで昼食です。夜のお楽しみ会、そして最後は花火大会と大満足でした。

最終日の分級発表会では各クラスの発表で盛り上がりました。キャンプを通して神さまのご計画で不思議なくらい天気に恵まれました。感謝です。

２．幼稚科デイキャンプ

8 月 27 日(日)午後 1 時から、教会で。

礼拝でキャンプが始まりました。白グループのフルーツポンチ作り、庭のプールで水遊び、子供たちの作ったフルーツポンチをいただいて、大型絵本『はらぺこあおむし』のお話を聞き閉会。参加者 24 名　教師 7 名でした。

← フルーツポンチ作り

↓ 園庭で水遊び

３．ジュニアチャーチタ涼み会

8 月 27 日(日)午後 5 時から、教会で夕涼み会がありました。みな早く集まって食事の準備です。焼きそば・たこ焼きそして幼稚科のフルーツポンチをデザートに楽しい時間を過ごしました。いつもゆっくりと話す時間がありませんが、いろいろな話を楽しみ、みなの健康と主のお守りを祈って解散。参加者 6 名　教師 4 名。

４．保護者科について

この機会をお借りして保護者科についてご紹介をします。

毎週保護者の方々20 余名が子どもたちと共に礼拝を守っています。

これだけの人々が教会へ。何かできないか。保護者の分級の時間を持とうという渡邊牧師の発案で、数年前から始まりました。

毎月第一主日、多くの保護者を前に 3 人の教師が順番で担当。

キリスト教入門から、皆の疑問に答える教理へと進み、今年は使徒信条の解説が進行中。

大きな伝道のチャンスになればと大切にしています。

＜賛美歌よもやま話＞　日本賛美歌学会第 17 回大会の報告

井澤　浩一

日本賛美歌学会第 17 回大会が 9 月 9 日（土）に、立教大学の諸聖徒礼拝堂で開かれました。

主題は「宗教改革と会衆賛美～500 年とこれから～」で、これにまつわる講演、研究発表などが行われました。要旨をお伝えします。

いつも会場となる教派の礼拝式で始まります。今回は立教なので日本聖公会の様式でした。

講演 1 はルーテル学院大学の江口再起教授の「神の声とルターの耳」。

ルターの改革は、当時のカトリック教会の現状改革を訴えたもので、カトリックの本質に反対するものではなかった。免罪符問題を通して、会衆が受け身になっていたことに対し、
①万人祭司＝役割は違うが神の前で上下はない。
②会衆賛美＝聴衆になってしまっていた会衆の礼拝への能動的参加を。また、人の声や音楽を神の贈り物と捉え、音と言葉の結びつきのすばらしさ、心を動かす力を説いた。

講演 2 は、フェリス女学院大学の秋岡陽学長による「会衆賛美の 500 年とこれから」。

キリスト教 2000 年の歴史における賛美歌の変遷、ルターの礼拝改革、ルター以降の会衆賛美の変遷について。

続いて、二つの講演を踏まえて、カトリック中央協議会の宮越俊光氏が、カトリック教会の変遷について講演されました。

ルターの宗教改革の影響を受けて、1545～63 年のトリエント公会議における典礼の統一（1570 年ローマ・ミサ典礼書など）。

以降の典礼運動（会衆が理解して、意識して聴き、歌う）。そして 1962～65 年の第 2 バチカン公会議による典礼と教会の刷新。ミサと聖歌の各国語許容などが進められた。

日本では、プロテスタントとの新共同訳聖書の発行、プロテスタントの賛美歌曲の聖歌への取り入れ（プロテスタントも讃美歌 21 ではカトリックの曲も取入れ）など、500 年目の現在、エキュメニカルな動きが進んでいます。

今月のメッセージ

――ホームページ巻頭言　から――

ホームページには多くの情報が掲載されています。
ぜひご覧ください
http://kakinokizaka-church.com

「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。まだ真夜中であったが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。
（新共同訳聖書･使徒言行録第 16 章 30～33 節）

夏の間、今年は雨が多かったですが、それでもクーラーばかりでは過ごせませんから、窓を開けることがしばしばありました。そうすると、町中ですが、時々、薪を燃やす匂いが漂ってきます。住宅街での焚き火やキャンプファイヤーなどではなくて、数年前に近くに開店したピザ屋さんの煙突からです。薪を燃やして加熱する大きな石窯を据えたピザ屋さんで、なかなか人気です。煙の香りのほんのりする香ばしいピザを食べさせてくれます。

そんなピザのことを考えていて、しばらく前に教会を訪ねてきた青年のことを思い起こしました。洗礼を受けることが出来るかと電話をかけてきて、会えるかとのことで教会を訪ねてくれました。会って話を聞くと、近々、イタリアに行く予定だと言うのです。イタリアに行くのは、ピザ職人となる修業をすることが目的なのだそうです。何だか、こちらの方が興味が湧いてしまっていろいろと聞いてしまったのですが、彼は日本に帰って来て自分の店を持つつもりはなくて、イタリアで店を構えてみたいと夢を話してくれました。

イタリアには、日本のラーメン屋さんがそうであるように、ピザだけを食べさせる店がたくさんあって、土地土地の特徴的なピザを焼いて食べさせてくれるのだそうです。たいてい一人で一枚全部を食べるので、時間が経って一切一切の味が少しずつ変わっていくのを楽しんで食べることも教えてくれました。今は東京のイタリア料理店で働いていてイタリアに渡る準備をしているけれども、自分が求めているのは、イタリア料理も出す、ピザも出すという店ではないんだ、と本当に生き生きと話してくれて、ついつい、いろいろと聞いてしまいました。

肝心の洗礼のことは、どういうことであったかと言うと、イタリアで結婚を約束した女性が待ってくれていて、彼女は敬虔なカトリック教徒の家庭の人で、彼女ももちろんクリスチャン、そこで自分もクリスチャンとなることが必要だと思ったのだ、とのことでした。ピザ一本で勝負したいと考える青年らしく、なかなか真っすぐな動機でした。彼には、洗礼を受けることは資格のようなものではなくて、洗礼を授けてくれた教会と繋がることでもあるのだから、もうすぐイタリアに出発するなら、向こうで待ってくれている彼女に相談して、住まうところの近くの教会によく通って、準備をして洗礼を授けてもらったらいいと思うよ、と話しました。

ピザだけを食べさせる一途なピザ屋さんのピザ、食べてみたいものだと思いました。教会は、それでは何のためにここに建っているのか。同じように、あれも、これもではないでしょう。洗礼によってクリスチャンを生み出すため世に建っているはずです。この目的を忘れてはならないのです。　　（牧師　渡邊　義彦）

―――編集後記―――

・教会学校の夏の行事の報告を書いていただきました。その中に保護者科のことを書いていただきました。この、とても大切なお働きのために祈りましょう。
・若い受洗者が与えられ、感謝します。原稿をお願いしたところ、間髪を入れず書いていただき、とても嬉しくなりました。
お持ちのタラントを発揮して、共に主のご用のために働きましょう。
・宗教改革 500 年の節目の年。相応しい原稿を「聖句・讃美歌」の欄にお寄せいただきました。「主の教会はただ一つ」！
・教会報へのご意見、ご感想をお寄せください。
（編集委員長　井澤浩一）

集会案内

主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分
聖餐夕礼拝　第 1 日曜日　午後 5 時
入門講座　日曜日　午前 9 時 30 分
教会学校　日曜日　午前 9 時
（幼稚科、小学科、ジュニアチャーチ）
＊ジュニアチャーチは中学生、高校生です。
聖書と祈り会　水曜日午前 10 時、午後 7 時 30 分

日本基督教団　柿ノ木坂教会
〒152-0022　東京都目黒区柿の木坂 1-31-19
電話　03-3717-3870（教会・牧師館）
03-3723-3870（ベテル幼稚園）
牧師　渡邊　義彦
協力牧師　松下　恭規